

---

# 空白の話 ～エデンの園～

緋鯉ナオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空白の話 ～エデンの園～

### 【Nコード】

N4110V

### 【作者名】

緋鯉ナオ

### 【あらすじ】

『夏のホラー2011 ～夏の夜には怪談を～』参加作品。有名大学を卒業しながらも、就職活動に失敗した日村幸太は、コンビニで世の中に不満を抱きながらアルバイトを続けていた。ある日、コンビニに蛇穴徹というライフケアセンターの社長がやってくる。蛇穴は日村に試用期間として『ある場所』で働かないかと誘う。そこにいたの変わった従業員と入居者すべて老人という異様な環境だった。首のない死体を見たことで、奥深い奈落に日村は落ちていく――。

『空白の話』第5話。社会の底なしの闇が常識を覆す。

『お前は呪っているか？——この世のすべてを』

——聖神病院。

病床数400症の中規模病院に、変わった人物が入ってきた。髪は白髪、手には汚れたバッグを持ち、季節にまったく似合わないボロボロの茶色いコート。受付に座る、派遣社員の女性が男に目を細めるのは当然のことだった。

「すまんね」

「はい、なんででしょう？」

白髪の男の声は若い。前髪と半開きの目蓋により両目の眼は隠れているが、瞳の色は黒真珠のような光がある。凡庸な顔つきに、やる気のなさそうな態度、口からタバコの臭いがする。それでもどこかしら憎めず、人に警戒心を与えない。この男には何故か信頼できる何かがあった。

「面会がしたいのだが……」

「はっ、はい。ご面会ですね」

ヨダレが出そうになるのを寸止めし、女は笑顔を何とか維持できた。

「どちら様のご面会でしよう？」

「えっと……日村幸太……だったな」

「えーと——あっ、交通事故の」

女の表情がこわばった。先日ICUから出たばかりの患者だ。今は病棟に移っている。その間お家族が来た履歴はなし。健康保険証はもっていない。名前がわかったのは口頭でだ。電話番号すらなく、家族に連絡すらつかない。本人も意識が混濁しており、話ができる状態ではない。確実に病院にとってはやっかいな患者の1人だった。今頃警察が必死で家族を探していることだろう。

「俺はその交通事故にいてね。病院に連絡した者だ。警察の事情聴取もようやく終わったんでな。ついでに患者の様子を見に来たってわけだ」

「あゝなるほど」

そういえば当時の当直者から変わった男から通報があったと聞いている。なるほど、確かに変わっている。女は妙に納得すると、面会記録表に男の名前を記載させた。男の名前は『ドウジ』とだけ書かれてあった。

ドウジは受付の女から日村は『202号室』にいと聞かされ、そこへと向かった。途中、車椅子の老人から「外人さんか？」と言われ、曖昧に笑うだけで答えなかった。廊下を歩く看護師からも注目の的だった。

（やれやれ……やはりこういう人の多い狭い空間は苦手だ）

自らの風貌をよく知っているドウジは軽く愚痴った。

好きなタバコも全館禁煙なので吸うことができない。欲求を我慢し、ドウジは『202号室』の前へとたどり着けた。

（個室？）

ドアを開くと、病室に患者1人だけで誰もいないようだ。患者、日村幸太は病室のベッドで頭に白い包帯を巻き、静かに眠っていた。ドウジは起こさないように足音をたてず、日村に近づいた。

「元気そうだな」

病人に「元気か？」と聞く矛盾に1人苦笑いし、ドウジは熟睡しているのであれば一目見て退散しようと考えた。

「……誰だ？」

気配に気づき、日村の両目が開いた。

「よう。俺を覚えているか？」

「……わからない」

日村はドウジを見ようとしめない。ドウジは頭を掻いた。

「まあ覚えてないのならいいさ。じゃ、邪魔したな」

血も通わぬ赤の他人だ。挨拶程度でいいだろう。そう判断し、ド

ウジは病室から出ようとした。

「まて」

以外なことに呼び止められた。

「せっかくだ——俺の話を聞いていかないか？」

願ってもないことだった。今回わざわざこの病院に来たのは、何か面白い話が聞けるかもしれないという期待があったからだ。ドウジはこれまで多くの人の噂話、都市伝説、怪談話などを聞き、記録することを生業としていた。

——そして人も、ドウジを見ると何故か『人には絶対に話せない話』を話したくなる。まるで何かに憑かれたように。

「いいのか？ 赤の他人だぜ？」

「その割には心が躍ってるじゃないか」

「ああ、願ってもないことなんでな」

「……助けてもらったお礼だ。つまらない話になるかもしれないが、いいか？」

「かまわんさ」

ドウジはベッドの近くにあるパイプ椅子に座った。日村の両目は天井を向いたままだったが、ポツリポツリ話し始めた――。

\*\*\*

——世の中は就職氷河期だった。

だけど、有名大学に入学した俺には関係ないと思っていた。ほら、よくニュースで就職が決まっていなくて言うてる学生がいるだろ？

テレビの左画面に『大学生』とか『大学4年生』とかテロップが出ているはずだ。あれは三流大学出身者で全国的に知名度がないから『大学名』を出せないでいるだけなんだ。俺はあんな奴等とは違うと思っっていたね。

ネット就職系サイトに自分の自己PRや志望動機を提出し、履歴書は『就職課』に何度も添削してもらい、面接の特訓だった。職種は『営業』だったが、法人対応のみの楽そうなやつを選んだ。消費者対応の営業は駄目だね。胃に穴が開くことが目に見えてわかるからな。とりあえず有名で、大手で、一流の会社名がつけばどこでもよかった。

最初は商社を選らんだ。もちろんお前でも知ってる会社さ。なんでか？ まあ給料が良さそうだったし、就職すれば友達にも自慢できるだろう？ 最終面接まで行った時は、もうここに就職しよう決めてたけどな。でも落ちたよ。理由はわからん。

次は本命の大手メーカーだ。世界的にも有名なメーカーで、絶対にここに行きたかった。OB・OG訪問やインターシップはいかなかったけどな。えっ？ インターシップって何？ まあ簡単に言うると直接会社に入って職業体験をすることさ。行っちゃって無駄だぜ。会社案内しかしないし、結局本音の部分がわからないからな。外国と比べるとやっぱり日本は薄い醬油だね。しよっぱいって意味だよ。

その会社はネットで募集が出ていた。職種は『営業』だ。もちろん即応募した。まずネットによる書類選考、次に筆記試験、そして面接だ。面接は2次面接まで行ったな。部長が出てきて色々質問されたよ。俺は完璧に答えた。だが落ちた。ショックでその日の会社説明会はすべてキャンセルしたよ。

悔しいから浪人してもう一度その会社を受けた。俺はどうしてもその会社に入りたかったからだ。なのになまた落ちた。次の年も受けた。第二新卒としてな。だがやっぱり駄目だった。それで25歳までフリーターをやっていた。

そこからさすがに就職してないのがキツくなった。親は地方に住んでいるし、仕送りはかなり厳しい。生活費はかかるし、20歳から年金だって払わなけりゃならない。まあ、年金は特例を使って全額免除。だけど国民健康保険の保険料がかなり痛かった。中小企業の就職も考えたが、興味がないし、待遇も悪そうだし、即潰れそ

うだからやめた。名前だってよくわからんしな。

あれこれやっているうちに29歳。職業は『100円コンビニのバイト』恥ずかしくて大学から隣の町に引っ越したよ。もし知り合いに会ったら嫌だからな。そのコンビニがまた変な奴ばかり来ててね。一緒に働いてた奴なんてワシだか、鷹だか、よくわからん入れ墨を背中に入れてたしな。どっか飛んで行きたいのかよって思ったよ。あとは日本語がよくわからない中華系の人々な。

客とこの中華系の人々が揉めているの仲介するのが俺の役目だった。店長？ 出てこないね。奥で家出した娘が帰ってくる準備をしてたよ。たぶん死んでると思うけど。娘の顔写真見せて貰ったけど幼稚園生なんだよ。日付は5年前になっているから「もう小学生ですか？」って聞いたたら、「違うよ！ まだ幼稚園に通ってるよ！」って逆ギレされたしな。狂ってるよ。

まあこんな感じだったけど不況なのかね。100円コンビニは大盛況。最近は老人ばかり来るけどな。売り上げが悪いつてのは聞いたことがなかったな。だけどある時、中華系の人々の1人。名前は忘れたが女だった。その女が若いお兄ちゃんと揉めてんだよ。

「貴様等中華が添加物や薬品を使うから俺のニキビがひどくなったんだ！」

と、その兄ちゃんは両頬のブツブツを指さしていた。それはお前の不摂生のせいだと突っ込みたくなった。

兄ちゃんは洗濯のしすぎで藍色のはげたジーンズの上下にボサボサ頭。黒ぶちの眼鏡をかけている。どう考えてもこういったタイプの客はクレームを言いそうにないはずだが、よほど中華が気に入らないらしい。

「オ前等が生産地ニ薬品ヲモチコミ、商品ヲ安ク買イタタカラワルイヨ」

と、中華も負けていなかった。

「黙れ！ 中華め！」

と、気持ちがいいくらい兄ちゃんは言い切っていた。そこで俺が



出て行って平謝りするんだ。大概これでおさまるはずだった。

——だけど今回は違っていた。

「——やめろ」

黒いダークスーツに体は細い、前髪はオールバック、目は感情のない無機質な瞳、背は高い。目を合わせるだけで威圧感のある男が兄ちゃんを止めた。兄ちゃんは蛇に睨まれたカエルのように動きが止まった。一瞬ヤクザかと俺は思った。

「こんな所でくだらんことはするな」

「へっ、へい」

やっぱりヤクザの兄貴だ。やっかいだな。

「損害賠償ヨ。告訴シテヤルネ！」

兄ちゃんが大人しくなった事をいいことに、中華が騒ぎ出した。怖い者知らずとはこのことだ。俺は慌てて中華の前に立った。

「すっ、すみません！ コイツ日本語がよくわからないもので…」

「邪魔スルナ！ コノ害虫メ！」

いつも助けてやってるのに『害虫』はないだろと、最悪の気分になった。

俺が謝っている最中に、男は中華に何かを渡していた。一万円札だった。中華の態度がすぐに変わった。

「サンキュウ」

中華はしっかりお金を受け取るとレジへと戻っていった。お前のために俺が謝ってやっているのにその態度は何だと言いたかったが、疲れてドットやる気が失せた。

「——おい、お前」

渋い声が俺の背筋を凍らせた。オールバックの男が正面に立っていた。「はっ、はい。なんででしょう？」

初対面の男に「お前」呼ばわりされることにも慣れてしまっていた。我ながら自分が情けないと思った。

「さっきの女に渡したお金は安いかな？ 高いかな？ どっちだ？」

「へ？」と素っ頓狂な地声が出てしまった。「またやってるよ…」と男の取り巻きであろうお兄ちゃんが呟いた。

「あの……どういふ？」

「どうした？ 質問が難しいかな？」

当然答えが返ってくるものだと思っっているらしい。多少躊躇したが「高いです」と答えた。

「あの程度の金でか？ 安い男だ」

「……すみません」

早くここから逃げ出したいくて意味もなく謝った。

「それでは最後の質問をしよう」

屈辱を感じる間もなく、また男の質問がきた。

「お前は呪うか——この世のすべてを」

時間が止まった。

空間が制止し、男と俺の時間のみが流れていく。

男の真っ黒な瞳が俺の顔をのぞき込む。

何故だろうか。

男の背に何か黒い影が見える。

それが幻想なのか、俺が狂ってるのか、判断することさえできなかった。

「はい」

どうしてそう答えてしまったのか。

何もかもうまくいかない世界を俺は恨んでいたのか。

昼間だというのに外が暗く、闇に飲まれているような感覚がする。

「――そうか」

男は胸のポケットから名刺を取り出した。その名刺には『株式会社 ライフケアセンター 代表取締役 蛇穴徹』と書かれていた。さらぎとおる

「お前の給料はいくらだ？」

「……15万くらいです」

「おい。黒田」

「はっ、はい」と黒田と呼ばれたお兄ちゃんは、ポケットからこのコンビニでも売っている100円のメモ帳とボールペンを取り出した。蛇穴はそこに何かを書く俺に渡した。

「明日ここに来い。正社員になれば月給70万を保証しよう」

切り取られたメモには住所が書かれていた。知らない住所だ。

「7……70万……」

「試用期間中は20万だそう。チャンスは明日のみだ。それ以上は受け付けない。よく考えるんだな」

そう言うと蛇穴はコンビニから出て行った。黒田は出て行く間際「給料分蔵しいからな。まあよく考えな」と手を振った。

「……70万。年収にしたら840万」

俺の手は震えていた。しばらく呆然と立ち尽くしていたが、すぐに店長の元へと向かっていった――。

――

「よく来たな。あの金額でビビって来ない奴の方が多いけどな」

眼鏡をかけた兄ちゃん、黒田は不気味な笑みをうかべていた。俺はメモに書かれていた住所を地図で調べ、少ない交通費を使ってここに来た。ここは普通の小さなオフィスビルだった。

中に入るとすえた臭いが充満していた。清掃会社すら入っていないようだ。テナントはまったく誰も入っていなかった。3階建ての

ビルだが、都内ではなく、住宅地に埋もれている。玄関には張り紙で『関係者以外立ち入り禁止』と書かれてあった。

何度も住所を確認し、間違いないと思ったので中に入ってみた。すると、黒田がニヤニヤ笑いながらビル玄関正面の階段に座って待っていた。空き缶にはタバコの捨てガラが置かれてあった。

「さて、それじゃ今持っている身分証明書はあるか？」

「身分証明書？ ……国民健康保険証ならあるけど」

「ならソイツでいい。俺が預かる」

一瞬、どうしようかと迷ったが、結局財布からペラペラのカード型タイプの国民健康保険証を出した。黒田は健康保険証を預かると、無精髭を手でさすりながら中身を確認している。

「日村幸太……平凡な名前だな。悪役には相応しくない」

「ええ。よく言われます」

「年は……29か。もうすぐ30じゃないか。俺は今年で40だがね」

「えっ!？」と目を見開いてしまった。黒田はどう見ても自分と同じ年だと思っていたからだ。だが、よくよく見ると無精髭に隠れてしまっているが、確かにシワが深い。40と言われても不思議ではない。よく黒田を観察していなかったようだ。人の顔きちんとするのが苦手な性格が裏目とでた。

「なんだよ。俺はそんなに若く見えるか？」

「はい」

「そうかそうか。お世辞じゃないな？ 気に入った。本来は厳しい試験を受けて採用って形になるんだがな。ウチの社長がお前を気に入ったらいいんで今回は特別だ」

やはり正社員になるために試験があったらしい。やけにいい加減だなと思っていた。しかし、あの社長に気に入られるとは喜んでいいのやらどうかわからなかった。

「それじゃ段取りを説明するぞ。まずこのアイマスクをつけてもらう」

黒田はズボンのポケットからアイマスクを取り出した。100円で売っているようなタイプだ。

「そして車に乗ってある場所に俺と行く。もちろん住み込みで働いてもらう。試用期間は一週間。長くはない。試用期間中の給料は20万で手渡しだ。お前にとっては高いだろう？」

俺はコクリと頷いた。

「一週間後、適正があれば正社員登用試験を受ける。合格すれば晴れて正社員だ。正社員になれば本格的に住み込みで働いてもらうから、今住んでいるのは賃貸マンションか？」

「そうです」

「そこを解約してコチラに来てもらう」

それだけ説明すると黒田は息を止めた。どうやら俺の反応を伺っているらしかった。

「それでは日村君」

「はい」

「――やるか、やらないか。どっちだ？」

黒田は両手をわざとらしく広げた。もし承諾すれば俺は今から仕事場に行かなくてはならない。断ればこのまま帰れるだろう。ここがターニングポイントだ。今ならまだ引き返せる。

黒田の話を聞く限り、明らかにマトモな会社ではない。昨日、常連となったインターネット喫茶で『ライフケアセンター』を調べてみた。検索数はあったもののどれも『代表取締役 蛇穴徹』の名前はなかった。

だが、俺に仕事を選べるだろうか？ 大手の面接に行けば、必ず履歴書の経歴欄で人事に顔をしかめられ、「どうして就職しなかったのかな？」と学生に尋ねるような口ぶりで言ってくる。色々な理由を考え、受け答えしてみたがまったく受けつけられない。最終面接まで行っていた学生時代が懐かしい。中小企業にも行って見たが、

『クールビズ』とか言ってクーラーすらない待合室に嫌気がさした。昨日、中華に言われた『害虫』という言葉が脳内を響かせる。

ココに就職すれば稼ぎはいい。資金を貯めれば、もしかするともう一度やり直せるかもしれない。

そう――

――『普通の生活』というものに。

「やります」

喉の奥から声がでた。黒田は広げていた両手のうち、右手を降ろすと握手を求めてきた。どうやら左手は『残念』の象徴だったらしい。

――黒田の黄ばんだ前歯が『猿』を連想させた。

――

アイマスクを取ると、ここは深淵な山の中だということがわかった。車に乗せられている途中で、鼻から緑の匂いがすると思った理由がようやくわかった。周りを見回しても森ばかり。刺激のある都会人には耐えられないだろうなと思った。

車から降りると、廃墟のような建物があった。どう考えても築30年以上はたっている。元は小さなホテルだったのか玄関は広く、洋風な造りになっていた。

「お前の仕事は簡単な雑用だ。飯やりと生ゴミ捨て。それだけさ。有名大卒様には物足りないかもしれないがね」

一応黒田に履歴書を渡していたから『学歴』が知れてしまっている。俺はちゃんと履歴書を書いてしまったことを後悔した。

「じゃ、入ろうか」

柔らかい口調で黒田は言った。もしかするとコイツも大卒なのかもしれないと俺は思った。粗ぶっているが、どこか物腰が柔らかい。育ちの良さを感じさせる。蛇穴が信用するのもわかる気がする。

建物に入った瞬間、俺は「うっ!？」と鼻をしかめた。糞尿の臭いがすごい。吐きそうになる。だが何とか耐えることができる。

「大丈夫だよ。貧乏人が自分の臭さに慣れるように、しばらくすればお前だって慣れる。人はそういうものさ」

やけに黒田が優しい。むしろ気色悪い。

「ここにはホームレスや捨てられた老人が50人ほど暮らしている。ほとんどは死にかけてる奴ばかりだ。そういう奴の方が扱いやすいからな。そいつ等に食事を与え、お世話をするのがお前の仕事だ。どうだ？ 社会貢献してるだろう？」

それが社会貢献しているのかどうかはともかく、薬とか殺人とかそっちの方が気になっていた俺にとっては安堵のため息をつくことができた。

——だが、それは『普通の世界』とは全く違っていたことに、俺はまだ気づいていなかった。

「宮ちゃん。コイツが新人の日村君だ。よろしく頼むよ」

厨房では黒田と同じ、眼鏡に口髭をはやした背の低い男がいた。名前は宮本敦というらしい。チラリとコチラを見ると、黒田と同じく黄色い歯を剥き出した。

「あれ？ 以外にマトモそうな兄ちゃんじゃないの？」

「そうだろ。さすが社長だ。人を見る目があるぜ」

「じゃあ社長のお墨付きってわけね。よろしく頼むよ。お兄ちゃんねちっこい口調の男だ。「よろしく」と頭を俺は下げた。

厨房で食事を乗せた台車を受け取ると、入居者のいる棟へと向かう。食事を運ぶのはもちろん俺の役目だ。唯一の救いは、食事を運

ぶだけの小型エレベーターが動いてくれたことだろう。黒田は鍵束をジャラジャラ鳴らし、俺に注意点を述べた。

「入居者のいる部屋は原則鍵をかけている。たまに逃げ出す奴とかいるからな。後、飯は最低限しか与えていない。体力をつけさせないためだ。年齢は50以上の奴ばかりだからお前が本気で戦えば勝てるから安心しろ。ガタイのいい奴ももちろんいるが、鎖で繋いであるから襲ってくることはない」

「……なんだか監獄みたいですね」

「監獄？ 監獄かつ！ ははっ！ まったくだ。ここは監獄棟だな」  
何がおかしいのか黒田はケタケタ笑い出した。

そうなるとうつ疑問点が残る。どうやってこの施設は儲けを出しているのかという所だ。給料が70万円というのなら、相当な儲けがなければ従業員にお金は出せないはずだ。

「あの……従業員は何名ですか？」

「ここは俺と宮本とお前の3名だよ」

「ここは」という言葉に引っかかった。もしかすると他にもあるのかもしれない。

「3名だけでやっていけるものですか？」

「2人だってやっていける。今までそうだったからな」

ということは、単純に計算して3名で年収は2520万。経費もかさむだろうからもっとお金はいるはずだ。

「あの……お金はどうやって儲けているんですか？」

直接質問してみた。

「さあな。社長が市からお金を貰ってるみたいだが……。あとはどこからお金が入ってきてるんだろうな」

市からというのはもしかして『生活保護費』のことではないだろうか。ニュースでやっていた『貧困ビジネス』というのを思い出した。ホームレスを施設に隔離し、自治体から生活保護費を徴収するビジネスだ。もしそうなら社会の悪の中にすでに入ってしまったている。



入居者のいる部屋のドアを開けた。中では蛍光灯が一本しか光っていない。経費削減ということであらうしているらしい。建物内に充滿する臭い以上の臭いが俺の鼻に強制敵に侵入してくる。喉がヒリヒリ痛んできた。

「餌だ！ 餌の時間だぞ！ みんな集まれ！」

動物の飼育員のようなかけ声で、黒田は入居者を呼び集めた。1つしかないテレビを見ていた3人の入居者はのそりと動いた。

「……うっ」

3人の老人は首にペット用の首輪をつけられていた。「チリン……チリン……」と首輪の鈴が不協和音を鳴らす。3人とも顔は吹き出物だらけ、1人は太股に引つ掻いた爪痕がくつきり残っている。もう1人は股間に茶色い汁が雫となって落ちていた。3人目にいたっては歯が黒く変色し、モゴモゴと何かを食べていた。

腐臭がした。こめかみが痛い。胃の中のものが逆流してきそうだ。

――アレは人間なのか？

自分の心に浮かんたおかしい疑念が飛びついたらまま離れない。2本足で立ち、人間のような形はしている。だが、形だけで魂がない。いや、魂のない人形の方がまだ人間らしい。

「さあ喰え！ ありがたさを噛みしめろ！」

使い古したカップラーメンの容器に黒田は食事であるお粥を入れた。お粥は黒く変色していた。中に変な液体を入れているのではないだろうか。

「日村君。これが毎日の君の仕事だ。やってみたまえ」

急に貴族口調になった黒田からお玉を渡された。容器にお粥を入れていく。老人達は異様な液体のお粥を吐き出すことなく口に頬張った。

「部屋に刃物は禁止。自殺や殺し合いをするからな。ライターとか燃えるものもだめだ。与えるのは食事と自然を録画したビデオだけ。テレビにアンテナはつけていない。以上だ。よく理解したか？」

「はい」

あまりにも自分の心が動揺しないことに驚いた。お金がないので『デジタル対応』のテレビが買えず、携帯のワンセグだけでテレビを見ていた。後は食事するだけだ。人間のやることなど『寝て、食事して、セックスするだけ』という言葉を誰かが言ったが、その通りだと思った。やることなどしれているのだ。

だが自分が動揺していないのはそれだけじゃない。過度な情報によってこういう状況をどこかの映画かレンタルビデオで見たことがある。もしくは書籍で読んだのかもしれない。「ああ、こういうのもあるんだな」という気持ちだが、自分の心に安定感を与えている。もしかすると1人でシミュレーションしていたのかもしれない。試合前に選手がよくやるイメージトレーニングというやつだ。

「さあさっさと仕事をすませようぜ！」

と異常なテンションな黒田に案内され、施設内すべての人間の食事を配り終えた。

ガッコン——ガッコン——

山のどこからか鉄を叩く音がする。建設中の建物でもあるのだろうか。それとも地元の工場からか。その無慈悲な念仏をこれからも聞くことになるのだろうか——。

——三日後。

リアカーの金属製のパイプが痛い。手に豆ができたようだ。施設から出て約3キロ。そこに目印であるペットボトルがある。

「……ふう」

ようやく到着した。ペットボトルの墓標が地面に何本も突き刺さ

っている。宮本に案内された場所だ。宮本は速乾性のシャツを着ていて意外にガタイはいい。こんなリヤカーに乗せた荷物など1人で十分だと言っていた。

施設には50人の老人がいるというのに静まりかえっている。聞こえるのは鳥か虫かそれだけだった。

「ここにするか」

リアカーからスコップを取り出し、穴を掘る。タンポポが空へと飛翔する。地面は柔らかく、スコップを当てればすぐに崩れた。途中で逃げ出す奴もいたようだが、こういった仕事は案外向いているのかもしれない。嫌ではなかった。逃げ出した奴はまだ若く、蛇穴に捕らえられ、あの施設にいるとのことだが皆老人のようなので誰かわからなかった。

濃い森の香りが鼻孔をくすぐる。この光景を眺めていると、実家の山を思い出した。夏には蛍が飛び、冬には全面に広がる雪景色。買っておいいたスポーツドリンクのペットボトルを口に含んだ。肉体労働の後の水分補給は心地いい。森から差し込む太陽の光を浴びながら俺の気持ちは最高潮だった。

「さてと」

穴を掘り終わり、リアカーをバックさせた。リアカーには布の袋があり、サイズは160?ぐらいあった。中身は聞いてない。臭いで大概はわかる。「夏は熱中症で死にやすいからね」と宮本が呟くように言ったことを思い出す。俺にはもう興味のないことだった。

リアカーを前へ上げ、後ろから布袋を穴へと落とした。後は埋めるだけだ。スコップを手に取り、穴をのぞき込んだ。

「――うっ」

また呻いてしまった。最近は何くことばかりだ。布の袋を閉めていた縄がほどけ、中身が出ている。中身は予想通り、老人の死体だった。ただあるべきものがない。人間が人間でいるために必要なある部分がない。

——その死体には首から上がなかった。

ダラリと両足を無造作に広げ、両腕は人形のように地面に置かれ、筋肉のほとんどを失った細い体についているはずの——頭がない。乾いた筋肉、腐った血管、砕けた骨、ぽっかりと開いた首の穴から何か音が聞こえる。それは亡者の叫びか、鬼の誘いか……耳に抱きつき離れない。小学生の時に買ってもらったリコーダーがうまく鳴らなかった音に似ている。

(……見るな)

スコップで掘り出した土を穴に落とす。速く、即座に、呼吸をおかずに。

(見るな、見るな、見るな)

見ないものは現実ではない。それは夢か——ただの幻。幻想だ。穴はみるみる埋まり、山となって盛り上がっていた。スコップを放りだし、地面に尻をついた。穏やかだった呼吸が激しく上下する。現実が無意識化の中に入ってしまった。もう取り出すことができない。

「はあ……はあ……」

——俺は何をやっている。

手をついた両腕から、何か冷たいものが這っていた。

——このときは気づかなかった。ある違和感に。

——六日後。

与えられた仕事をこなしていると、黒いセンチリーが敷地内に入ってきた。どんな富裕層が来たのかと思えば、社長だった。他に

も4人の黒スーツに黒サングラスの男が降りてきている。どう考えてもその面は一般人ではない。

「久しぶりだな。日村君」

社長の蛇穴は出会った時から表情が変わらず、ロボットのような冷徹さで俺に接してきた。

「ここまで来てやめる——とは言わないな？」

静かに、語りかけるように、蛇穴は俺に威圧した。ここで色々見ってしまった以上もう逃がさないということだろう。もし断れば俺は施設に入れられる。血を抜かれ、足に鎖を繋がれるのだろうか。人に飼われる犬のように。

「大丈夫です」

感情のない返事。いつから俺はこんなに感情を失ったのだろうか。「いいだろう——明日で試用期間は終わりだ。今日の試験に合格すれば正社員にしてやる」

蛇穴は首で後ろの男達に合図した。

「今から10分後——施設奥の部屋に来い。案内は黒田にさせる」  
それだけ言うと、施設へと入っていった。4人の黒いスーツの男達も一緒だ。普通の人間ならこれから起こることに強い不安を感じるのだろうか、俺は何も感じなかった。ただ蛇穴の背中から視線を外し、また外の見張りを続けていた。

しばらくすると黒田が来た。

「おめでとう日村君」

何がおめでとうなのか意味がわからない。だけど最近このキャラも悪くないなと思えてきた。人間何にでも慣れるものだ。

「やったじゃないお兄ちゃん。正社員になったら俺と毎日仕事できるな」

宮本もいたようだ。すでに俺が正社員になる予定でいる。このネチッコイキャラにも慣れてきたな。

「——さて、さっさと行こうか。社長はうるさいからな」

俺は黒田の後ろについて行った。

「がんばれよ。社長の前だ。無様なことだけはすんな」

後ろで宮本が声援を送ってくれる。何をがんばればいいのか訳がわからない。そのイケメンスマイルは百貨店で立っているマネキンに似ていた。

黒田は施設の一階奥の部屋に俺を案内した。奥の扉は大きく両手を使わなければ開かない。どこかの武道館の扉のようだ。

「ここだ。社長はこの部屋にいる」

黒田の鼻息が荒い。何をそんなに興奮しているのか。

「じゃ、俺はここまでだ。日村君——世界の常識が変わる瞬間に心を震わせな」

またどこかで聞いたことのあるような台詞だ。黒田はとことんこういうのが好きらしい。俺は何も答えなかったが、黒田は満足気に手を振ると、元来た場所へ戻っていった。太陽の射さない日陰の中に、黒田が溶け込んでいつているような気がした。

俺は両手を使って大扉を開けた。中は想像以上に何もなかった。

大窓から傾いた太陽の光が差し込む。いるはずのない神に祈る、神父が出てきそうな場面を思い出す。差し込む太陽の下に、椅子が1つあり、そこに老人が座っていた。

床は木で造られていた。ホコリ臭い。遠くからまた、鉄を叩く音がする。部屋は大扉のわりには狭く、15畳ぐらいだろうか。立派な大窓ぐらいいしか特色がない部屋だ。天井に蛍光灯の灯りはない。

「来たな。それでは試験を始めよう」

蛇穴が太陽の影から出てきた。それは神父を嘲笑う悪魔のように見えた。今から何が始まるのか俺の考えはカラッポで、感情すら湧いてこなかった。

「まずは食事だ」

影でよく見えないが机があるらしい。蛇穴は皿を持つと俺に差し出した。皿の上にはチョコボールのような小さなものがあった。少

し赤黒い色をしている。

「喰え」

躊躇することなく俺はそれを手に取った。たった6日間でここま  
で感情が抑制されているとは思わなかった。手にぶよぶよとした感  
触がある。ゼリーか何かかと思った。

(……うまい)

それは甘く、水々しい。口の中で旨味の快感が広がっていく。久  
しぶりのうまい食事に俺の抑制された感情が一瞬だけ外れた気がし  
た。

「最後の晚餐だ」

機械のような表情で、蛇穴は皿を机に下げた。

「次はこれだ」

今度は机の上からノコギリを取り出した。異様に大きい。光の加  
減でよく見えないが、何かの液体がこびりついている。

「このノコギリを使って、その老人の首を切り落とせ」

蛇穴は俺にノコギリを渡した。俺はノコギリを渡され、しばらく  
呆然としていた。今蛇穴は何か異常な事を言わなかったろうか？  
俺の感情が火種となって燃え上がる。

「……今……何ていいました？」

「うん？ 聞こえなかったか？ そのノコギリを使ってその老人  
の首を落とせ」

老人とは今椅子に座っているこの老人のことか？

「どうした。やれ」

感情がまた麻痺した。蛇穴の言うとおり、俺はノコギリを老人の  
首に当てた。老人はこれから死ぬというのにまったく動かず、閉じ  
た目を開けず、阿保のように口を開いたままだ。残っている歯が何  
本か口から俺を眺めている。

「……はあ……はあ」

手が震えている。俺にはまだ理性が残っていたようだ。体が止ま  
ってくれた。

「……はあ……はあ」

蛇穴は顔をしかめた。いつまでたっても俺がノコギリを引かないからだ。眉間にシワを寄せると俺の手を握った。

「こうやるんだ。はやくしろ」

俺の手を取り、ノコギリを一気に引いた。老人の首から血が噴水のように飛び散った。閉じられていた老人の目がカッと開いた。口から悲鳴のような空気が耳に入ってきた。

「うっ、わああああ!!」

俺は叫んだ。麻痺していた感情が一気に蘇った。それでも蛇穴は俺の手を支配したまま逃さない。

「そうだ。もっと力を込めろ」

ノコギリは何度も引かれた。何度も、何度も、何度も……。柔らかくなった老人の骨は簡単にノコギリの刃に負け、ゴリゴリとした感触がなくなった。

俺の体の中で何かが爆発した。

「――やめろ!!」

蛇穴の手を振り払った。老人の首は切り落とされ、逃げるように太陽の光から影へと転がった。

――いったい俺は何をしている。

激しく呼吸し、必死で息を整えようとした。両手は老人の血で真っ赤に染まっていた。それはまだ暖かく、ベツトリと俺の手に絡みついていていた。糸を引き、地面に垂れる血を真っ白になった頭で眺めていると、蛇穴の苦しそうな呻きが聞こえてきた。

「……やってくれたな」

「――えっ？」

蛇穴は机の下で尻餅をついていた。脇腹にはノコギリが刺さっている。普段では出せない力で蛇穴の手を振り切った副作用が、悪魔を倒す力となったようだ。



「……くっ」

蛇穴は大量の汗をかいている。脇腹から流れる血が止まらない。蛇穴の血は水溜りのように広がっている。

「ちっ、違う！」

完全に感情を取り戻したツケは大きかった。俺は首を振った。

「お前が悪いんだ！　こんなことを……俺にさせるから！」

「……フフ……ククククッ」

笑っている。感情のないロボット蛇穴が始めて俺の前で笑った。体温が急激に下がっていくのを感じた。

「見てみろ」

蛇穴の視線の先を追った。

何かが立っていた。

それはさっきまで首のあった——老人の体だった。

「ああっ……」

息のような声が漏れた。

首がないというのに、老人の体はしっかりと2本足で立っていた。さっき俺が見た時は確かに椅子に座っていたはずだ。

ガッコンーガッコンー

遠くで鉄を叩く音がする。

太陽の光が首のない体を照らす。

首元から赤い血がとめどなく流れている。

ガッコンー

口が勝手に開いていた。

瞬きすることすらできなかった。

この世に首のない人間が立つ事などできるだろうか？

あの死体を埋める時に感じた違和感——あれはもしかや死体が頑丈な縄を外して出てきたのではないだろうか？

ボコッ

老人の首の付け根がいきなり膨らんだ。赤い血が「パンッ！」と火花のように首から弾けた。全身に老人の血を浴びながらも、俺は微動だにすることすらできなかった。まるで血管と血管が短絡し、火花を飛び散らせたようだった。

首から何かが出てきた。イモムシのように短い足が何本もある。頭の部分が赤く、体表は血にまみれているが緑。まるで人の体から逃げ出すように、ブンブンと体を振り子のごとく振っている。老人の中にあつた肉や内臓がアチコチに投げ出された。粘っこい体液が床に滴り落ちた。俺は開いた口が塞がらなかった。

「それが……何なのかはわからん。正式な学識名もつけられていないだろう。偶然手に入った産物だ。何かに使えるかと思いついていた。それは若者や健康な者では育たなかった。免疫の弱いその老人のような者を使うとうまく育った」

虫の息になりつつある蛇穴が青い顔で俺に説明した。まさしくそれは俺の世界の常識が変わる瞬間だった。

「幼生の時に人の口に入ると、膜をつくって胃酸を逃れ、腸に到達し生育する。腸の皮膚のカスや入ってきた排泄物を食べ、腸の長さぐらいにまで成長する。その後はお前がさつきやったように、首を落とし、人体の制御機能を停止させれば生命維持の危機を感じ、一気に体が膨張し首から出てくる」

仮にあれをイモムシと仮定しよう。俺はあんな豚のように大きいイモムシを見たことがない。小学生の時、頭に落ちてきた毛虫に泣いていた自分が馬鹿みたいだ。それは必死で老人の体から出るべく、体を左右に振っている。そのうち重量がかかり、老人の体が崩れ落ちた。それでようやくそのイモムシの動きが止まった。

「なぜ……育てていた？」

俺の疑問に蛇穴は鼻で笑った。

「――そいつの肉が極上だからさ。喰ったろう？」

地べたで這いずり回るそのイモムシは一言、「オギャー」と鳴いた気がした――。

\*\*\*

「――以上だ」

ノートに鉛筆を走らせていたドウジの手が止まった。「ふう……」  
とため息をつく。

「悪いが喉が渴いた。水を持ってきてくれないか？」  
顔に巻かれた包帯の間から、黒い瞳がドウジを見下ろす。乾燥しているはずのミイラ男に頼まれたようで、ドウジは複雑な気持ちになった。

「いいぜ。面白い話を聞かせてもらったお礼だ。ジュースぐらいおごってやるよ。何がいい？」

「お茶でいい。できれば紅茶」

「いいだろう」

パタンと物語を書いたノートを閉じると、ドウジは席を立った。

（面白い話だな。本当に現実にそんなことはあるのか？）

自動販売機コーナーに小銭を入れる。チャリンと音が鳴りすぐに機械が「ピッ」と作動した。目的の飲み物は手に入ったが、急にタバコが吸いたくなり、ドウジは喫煙コーナーに向かうことにした。  
（うん？）

喫煙コーナーに向かおうと廊下を曲がった時、黒いスーツ姿の男が隣を通り過ぎた。まるで葬式に出席するかのように黒い上着まで

つけている。ドウシは気になり、後をつけることにした。すると、どうやら日村幸太に用があるらしく、『202号室』に入っていた。

「もう買ってきてくれたのか？ 早いな……」

目を閉じていた日村は、さっきの男とは違う気配に気づいた。ロボロの茶色のコートではなく、黒いスーツが見える。明らかに違う人物が来ているのだ。

黒いスーツの男は日村を見下し――ニヤリと笑った。

「――ふん。お前か。やはりとっさに救急隊員にお前の名前を言ったのがまずかったようだな。お前の行動は黒田の取ったデータと監視カメラによってチェックさせてもらった。嘘もここまでか」

ドウジに『日村』だと名乗った男は実は『蛇穴』だった。そして本当の日村は蛇穴のベッドの横に立っている。

「俺を助けにでも来たのか？」

「――そんなわけないでしょ社長？ 怪我したアンタをあの人達のように飼育してあげようと思ったなら逃げ出すなんて往生際が悪いですね。まさかあの施設に抜け道があったとは知りませんでしたよ」

前の気弱な日村とは見違えるような台詞を吐いていた。

「あんたもついてないな。事故に遭わなきゃ逃げ切れたかもしれな  
いのにな」

邪悪な笑みを日村はうかべる。蛇穴の目は動揺も感情もうかんでいない。元のままだ。

「俺を殺すか？ 組織による報復があるやもしれんぞ？」

「残念ですがそれはないですね。あんたが死ねば組織は俺達を切るでしょう。俺達は組織の事を何も知らないし、『生活保護ビジネス』はすでに話題になりすぎている。俺達が捕まれば足がつくかもしれない」

社会事情を日村はよく知っていた。この手は使えないと蛇穴は判断した。

「あの虫はどうする？ 組織はアレをほしがっていた」

「あれはあんたの副業だったらしいじゃないですか。組織はあのことは知らないみたいですね」

「よく知ってるな。黒田が話したのか？」

「ええ、僕と黒田と宮本で儲けることにしました。大丈夫。あとはうまくやりますよ。僕にはあなたがやっていたことが理解できる。あの虫達を飼育し、裏の世界三大珍味に加えることにします」

打つ手なし。蛇穴は諦めるように目を閉じた。許しをこうすることも、助けを呼ぶこともしない。次の行動を待っていた日村は、もう蛇穴は観念したものだと思いポケットに手を入れた。

「最後の質問だ。お前は呪っているか？——この世のすべてを」初めて出会った時に蛇穴が日村にした質問だ。日村はゴクリと唾を飲み込んだ。

「ええ、僕は恨んでますよ。僕を見捨てたこの社会を。この世界を。そして——人類すべてを」

蛇穴の両目が開いた。

それは人間の目ではなかった。

爬虫類のように瞳孔が細くなり、邪悪な瞳をしていた。

「お前はわかっていない。人が生きることなど無意味だ。生が無意味なら死すら無意味。呪われし人間よ——今後も弱者を喰い続けるがいい」

「うっ」と日村が呻いた。

ピキピキピキ……

日村の背中から黒い羽がはえてくる。

それは蛾のようだが、一番適切な表現はこうだろう。

まるでエデンから追放された人間が、墮天使となってこの世界に復讐に来たのだと——。

この意味が存在しない世界に――。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4110v/>

---

空白の話 ～エデンの園～

2011年8月10日03時28分発行